壮士ひとたび去って復（ま）た還らず

今村了介

集英社文庫

壮士ひとたび去って復た還らず

1993年12月20日　第1刷

定価はカバーに表示してあります。

著者　今村了介

発行者　若菜正

発行所　株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10
〒101-50
電話　東京（3230）6100（編集）
（3230）6393（販売）
（3230）6080（制作）

印刷　大日本印刷株式会社

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送りください。
送料小社負担でお取り替えいたします。

© R.Imamura 1993　Printed in Japan

ISBN4-08-748113-1 C0193

集英社文庫

壮士ひとたび去って復た還らず

今 村 了 介

目次

血染めの図面……7
城代家老就任……50
非常手段……104
近江屋太兵衛……172
暴風雨……220
辛い選択……274
水の流れた日……303
あとがき……351
解説——広くすすめたい見事な長編……武蔵野次郎 353

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

壮士(そうし)ひとたび去(さ)って復(ま)た還(かえ)らず

〈荊軻歌曰〉風蕭蕭として易水寒し。壮士一たび去って復た還らず。（十八史略）

血染めの図面

一

その一劃は茂木藩でも身分の高い武士が住んでいる所で、昼下りの時刻は物音一つしないほど静かである。道の片側は雑木林で、反対側は三尺ほどの高さの土堤に練塀が続いている。土堤は芝草に蔽われ、ところどころに松が生えている。その松の一本に烏が巣を懸けていて、そこから落ちた雛が一羽、松の根元でもがいていた。

長井廉太郎は剣術の稽古に行く途中、その雛を見付けて両手に掬い上げた。

「かえしてあげなさい、かわいそうですよ」

ふいに背後で甲高い声がした。びっくりして振返ると、五六歳ぐらいの女の児が大きな眼をいっぱいに瞠って睨んでいる。

「なんだ、おまえは」

「あたし、おつわ」

「自分の名におをつけるのか、変な子だな。どこの子だ」

「かぶらぎ」
「かぶらぎ？　ああ、宗一郎の妹か」
長井家は城代家老の家柄で、鏑木家は次席家老である。鏑木宗一郎は廉太郎と同じ齢で、二人は親友だった。
「宗一郎にうるさい妹がいるのは知っていたぞ。おまえがそうか」
「はやくかえしてあげないと死にますよ」
「いま戻してやるところだ。だがこれは自分で落ちたのだぞ」
廉太郎は津和を睨みつけ、雛を津和に押しつけた。
「持っていろ」
草履を脱ぎ、脇差を外して津和の持っている雛と交換した。
廉太郎が木に登り始めると、親鳥が飛び立ってぎゃあぎゃあ騒ぎ出した。巣の懸っている枝まで登り雛を巣に戻した時、急に親鳥が攻撃してきた。一度は顔すれすれを掠めて飛び過ぎた鳥が、反転して飛び掛ってきた時に羽が顔を打った。廉太郎は、思わず枝を掴んでいた手を離して顔をかばった。
身体が宙に浮いた。津和の悲鳴が耳に残り、廉太郎は意識を喪ってしまった。
廉太郎が意識を取り戻した時、まず眼に入ったのは母の妙の顔であった。その横に宗一郎と津和の顔が並んで見えた。
「気がつきましたね」

妙の声は落着いていた。その声で意識が一気にはっきりした。
「津和が家に知らせに帰ったんだ。死んだと言ってきかなかったからびっくりしたよ」
宗一郎がせきこんだ口調で言った。
廉太郎は頷きながら津和を見た。津和ははにかんだ表情でにこっと笑った。つられて廉太郎も笑い返した。
廉太郎が十一歳の初夏のことであった。
幸いなことに廉太郎はどこにも傷はなく、三日目には外に出た。もうどこも悪くない。
門の前に津和が立っていた。
「なにをしているのだ」
「まっていたの」
「待っていた？　誰を」
津和はにこっと笑った。それで廉太郎は津和が自分を待っていたのだと気付いた。
「毎日ずっと待っていたのか」
津和は首を振った。
「あさとひる」
「入ってくればよかったではないか、門の外で待たずに。だがなぜだ」
津和はまたにこっと笑い、廉太郎は理由を訊くことを諦めた。
「宗一郎はどうした」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「かわ」
「かわ？　ああ川か。釣か」
「しらない」
「よし、私も行こう」
廉太郎は二三歩歩きだして振返った。津和はいまにも泣きだしそうな顔をして門の前に立ったままだった。
「一緒にくるか」
廉太郎が言うと、津和はぱっと眼を輝かせ、喜びを満面に現わして頷いた。
「宗一郎は連れていってくれないのか」
「かわはとおいから、いけないって……」
「遠いか、そうだな」
そうは言ったが、実は宗一郎は津和をうるさがって連れ歩かないのだと知っていた。
「おつわはちいさいから」
「いくつだ」
「六さい」
「六歳では無理かもしれぬな」
川というのは、城山（しろやま）の裾（すそ）を半周して茂木（もぎ）の町の真中を流れている中川である。川の西岸は町家で、東側が武家地である。

廉太郎たちは上流の方、城山を外れた山に近いところに行く。そこは小さな河原と淵のあるところで、釣も泳ぎもできるところだった。町家の子供たちはずっと下流の方で遊ぶ。いつの頃からかそういうように分かれて遊ぶようになっていた。

廉太郎の家からその場所まではほぼ半里はある。津和は小走りに近い歩き方でよく廉太郎に随いてきた。道のりの半分ほどを歩いた時にはもう汗びっしょりで荒い息をしていたが、時々掌で額の汗を拭くだけで何も言わずに歯をくいしばって歩いている。

「おまえは強いなあ」

目的の場所が見えた時、廉太郎は立止って言った。廉太郎は津和がいつ休もうと言いだすかと思いながら、わざと休まずに歩き続けたのだった。

津和は汗と埃りにまみれた顔でにこっと笑った。その笑顔は可愛かった。廉太郎は懐から手拭いを出して顔を拭いてやった。

「まったく大したものだ。男よりも強いぞ」

廉太郎は初めて津和の手を引いた。津和が自分の妹のように可愛く思われた。津和は嬉しそうにその手に縋りついた。

川岸の藪の中に細い道がついている。そこを抜けるとぱっと視界が明るくなり、風も急に涼しくなる。川原に子供が一人蹲っている。散らばっていた子供たちが喚きながらそこに集まるところだった。

廉太郎は津和の手を放して走りだした。

七八歳ぐらいの男の子が右手を押えてしゃがみこんでいる。その子の人差指にすっぽんが喰いついていた。宗一郎がその子の前に膝をついてすっぽんを押えていたが、どうしてよいか判らぬ様子だった。

「どうした」

「廉太郎……」

宗一郎は顔を上げて廉太郎を見ると、安心した表情になった。

二人は同じ齢だったが、遊んでいても最後の決定はいつも廉太郎がした。それは、城代家老の家に生を享けて、将来茂木藩を指揮することを運命づけられた者に生れつき備わった資質でもあり、また廉太郎自身の自覚によるものでもあった。廉太郎の決定に従うのは宗一郎だけに限らない。藩内のすべての子供たちがそうだった。廉太郎の家柄を恐れてそうなったのではない。自然にそうなるのだった。名前を呼ぶにしても、廉太郎と呼ぶのは宗一郎だけで、他の子供たちは長井さんと呼んだ。何歳か齢上でも元服前の子は当然のように皆そう呼んだのである。

取り巻いていた子供たちは廉太郎のために道を開けた。廉太郎は宗一郎の横にしゃがんだ。

「すっぽんだぞ」「喰いついたら雷が鳴るまで離れないぞ」「馬鹿、雷が鳴っても離れないんだ」

子供たちは口々に喋った。

「水につけたらどうですか」

「離れるのか」
背後で言った子に宗一郎が振返って訊いた。その子は口籠った。
「宗一郎、すっぽんを押えていてくれ」
廉太郎は脇差を抜いて膝の横に置き、小柄を左手に持った。すっぽんに噛みつかれている子は蒼い顔をしていたが、歯を喰いしばって痛みを怺えている。噛みつかれた指は紫色になっている。
「少し痛いぞ、いいか」
「指を切るのか」
宗一郎がびっくりして訊いた。
「右手の指を切ったら後で困るだろう」
廉太郎はそう言い、噛まれている手を右手で掴んで、小柄をすっぽんの甲羅の間に突っこんで首に突き刺した。小柄をぐいぐいとこじると、すっぽんの首が少しずつ出てくる。すっかり出てきたところで右手に脇差を持って、伸びた首をすぱっと切り落した。
皆があっと声を洩らした時はもう首は切り離されていた。瞬時の間を置いて子供たちは「わあっ」と喚声を挙げた。
廉太郎は首を切られたままだ噛みついているすっぽんの口の間に刀の切先を突っこんでこじ開けた。すっぽんが離れた指は深い傷がついて血が噴き出してきた。手拭いを裂いて傷口を縛り、指の根元をきつく緊めた。

「送っていこう、歩けるか」
その子は頷き、立上ってきちんと足を揃えると深く頭を下げた。
「有難うございました。指を無くさなくて済みました」
廉太郎はびっくりしてその子を見た。こんなに叮嚀なもの言いをする子は初めてだ。
「これは堀中小太郎だ。四日前に江戸からやってきて、学問所で知り合ったから今日は水遊びに連れてきたのだ」
宗一郎の言葉に廉太郎は頷いた。
小太郎の父は堀中市兵衛といい、お側役を勤めていたが、今度書院番頭にお役替えになって茂木に帰ってきたのである。
「帰ろう。手を胸より上に上げておくのだぞ、血を下がらせぬようにするのだ」
「はい」
「なんでこんなことになったのだ」
「小太郎はすっぽんを知らなかったらしい。甲羅を干していたのを見付けて指でつついたのじゃないのかな。そうだろう」
「亀だと思いました。噛みつくとは知らなかったのです」
「痛かっただろう、よく我慢したな」
「ほんとうは泣きたかったのです」
「幾歳だ」

「八歳です」
「私は長井廉太郎だ。家にも遊びにくればいい」
「ご城代の長井さまですね」
「父だ。私のことは廉太郎と呼べばいい」
宗一郎は驚いて廉太郎を見た。こんなことを言ったのは初めてだった。よほど小太郎が気に入ったのだろうと宗一郎は解釈した。
その時になって宗一郎はやっと廉太郎の袂を摑んでいる津和に気付いた。
「津和、おまえどうしたのだ」
「私が連れてきた。仲良しになったのだ。家の前で私の出てくるのを待っていたそうだ」
「それは珍らしいな」
「なぜ」
「これは強情っぱりで生意気で、六歳のくせに大人みたいに文句を言うんだが、そのくせ人見知りをするんだ。それが待っていたとは、よほど廉太郎が気に入ったのだな」
廉太郎は常々宗一郎が「うちの妹は」と愚痴をこぼしていたことを思い出した。「かえしてあげなさい」と命令口調で言われた時には生意気な子だと思ったほどで、あの様子では宗一郎の愚痴も当然だと思われた。
「おにいさまはだめ。おつわはれんたろうさまがすき」
津和が廉太郎の袂を強く引っ張って言う。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com